

今こそ 糸賀一雄

表題は朝日新聞 9 月 19 日朝刊「文化・文芸」。大きな見出しに「この子らを世の光に」。その一言で、障害者へのまなざしを百八十度転回させようとした」とある。

「障害者はかわいそう」。この言葉を無批判に使う人は、今はそう多くはないだろう。「障害者=かわいそう」との決めつけが差別的とみなされやすいからだ。

そうではない時代があった。人々は障害者に対する同情や哀れみの視線を隠そうとしなかった。知的障害児が「知恵遅れ」「低能児」とあたりまえに呼ばれていた。

そんな見方をひっくり返そうとしたのが糸賀一雄だった。だから「この子らを世の光に」と言った。

『この子らに世の光を』あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。『この子らを世の光に』である。」

有名なこの言葉は、糸賀の頭の中に最初からあったわけではない。糸賀に関する著書のある医師の高谷清さん(78)は「糸賀らが創設した知的障害児のための施設『近江学園』での実践の中で芽生えた理想だった」と話す。

60年に学園内に設置した母子像を糸賀は「世の光」と名付けた。由来は聖書の一節。悩み多き高校時代に友人にもらった聖書をきっかけにキリスト教を信仰していた。著書『この子らを世の光に』が65年に出版されると、この言葉は一躍有名になった。

今年7月、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が命を奪われた事件のあと、「この子らを世の光に」のフレーズがネット上で拡散された。その由来を知る者も知らない者も、この言葉にすがった。加害者の「障害者なんかいなくなればいい」という極端な発想に対抗するよすがとして。

糸賀が54歳で早世してから半世紀近く経つが、この言葉は社会の中で生き続けている。だがそれは、糸賀が理想とした社会がいまだに実現されていないことの裏返しでもあるのだろう。



(2016年9月29日)